

金平がひよいと出て行つた。水之助がいよいよ退出するとみえる。

赤堀水之助は仲間金平が揃へた草履を穿いた。睡りが足りたとみえて血色がいい。

龜山板倉家では、宿直の夜具が備付てあるので、葛籠を受取つたり、蒲團を受取つたり、宿直明けでも、そんな面倒がない。

水之助は霧除の下で佇み、仰いで、矢倉を見た。霧に薄められた城廓の一部分が、照る日の下で見ると違つて美しい、それに、水之助が見惚れたのか、さうではないらしい、何となく、ただ、仰いで見ただけらしい。金平に、珍しくも話掛けた。

「霧が深いなう」

「はい」

水之助はそれしか云はない。さつ／＼と歩いた。腰掛の前の方を通つたが、視線をちらとも向けない。

腰掛の中では伴右衛門の半蔵が、森平の源蔵と、外に背中を向けて、何か話してゐる。それを水之助は見落とした。

水之助は二の丸門を出て右に曲がつた。そこは昔、谿谷だつた處で、土木を起して高く二の丸石坂の道路を築いたので、濠の水は遙か下にある。が、今は霧のうちで見えない。濠の向うの横

内や阿野田の稻田も畑も全くみえない。

源蔵と半蔵とは、覺られぬやう、水之助のうしろから跳いて行つた。十二三間離れ、十間離しである。

二人とも、眞青になつてゐる。それとはすこしも知らぬ水之助は、何と思つたか又も佇んで、二の丸を振り返り、西丸を仰いだ。霧のうちに、石井兄弟の淡い姿がぼつんと思えてゐる、が、それに心付かずにゐる。

水之助がいつになく、しげ／＼と眺めてゐる龜山城は、東西四丁十二間、南北三丁、ぐるつと廻はると十八丁ある。矢倉七ヶ所、多門九ヶ所、門矢倉六ヶ所、門は十ヶ所、番所は七ヶ所又は九ヶ所といふ。五萬石の城としては堂々たるものである。

霧はすこし薄れたが、石坂から北の二の丸、西の三の丸まで、見通せるほどではない。

源蔵は要意の草履を片手に持つてゐる。只今、主人を送つて歸り道と、だれが見ても思はせる手段である。水之助の前を小腰を屈めて、急いで、通り抜けさうにした。

水之助はよくも見ず、すこし後にさがつたので、源蔵は、再び小腰を屈め、通り抜け、すこし行つて横に曲つた。

そこは西丸十一軒、西丸江戸部屋、西丸御用屋敷のある一區廓で、水之助が佇んだ處は、石坂

といつて巨大な石の板が敷いてある道路で、東側の濠の堤にすつと地固めに植込まれて年経た松の片側並木がある。西側は一方が明き屋敷、一方は家老板倉全右衛門の屋敷である。板倉全右衛門は龜山板倉家中で第一の名家であることは前々にいつた。

源藏が隠れたのは板倉全右衛門屋敷の地尻である。

半藏は草履の鼻緒が切れたかの如く、立停まつて、繕ふ眞似し、心付かれぬやうに水之助に眼をつけてゐる。霧がその姿をぼかしてゐる。

水之助が歩き出した。

と、横から道路へ、更めて出た源藏が、霧の中から俯向き加減に、水之助の前に近づいた。それと見て半藏が、水之助のうしろへ、大跨にさつくと近づいた。

人氣がその付近には全くない、通るものもだが、屋敷から出るものでもある。

石坂には石坂門といふのがある。大手、青木、江ヶ室、石坂、市ヶ坂、本丸下、京口の七ヶ所に、石坂下と江戸口を加へて、九番所ともいつたと云ふ。

石坂門の番所にそのときも、二人の足輕が、棒を突いて立つてゐたが、霧に遮ぎられて知らなかつたか、知つてゐて氣にしなかつたか、石井兄弟の動きを他所に立つてゐる。

朝の出勤の足輕が五人、そのとき、霧の中から出てきて、水之助に敬禮した。

水之助が歩きながら軽く答禮してゐる間に、前からは源藏が近づき、うしろからは半藏が近づいた。源藏は三四間の近き、半藏は五六間の近きになつた。

五人の足輕の姿が霧の中に消えた。

源藏が水之助に一間ほどの近さになつて、手にしてゐた草履を投げ放ち、口早にいつた。眼が血走つてゐる。

「石井宇右衛門が伴共なり、父兄の仇、覺えたるか」

と、いふうちに早、抜討の姿勢となつた、かと思ふ間に、水之助の眞向から斬りつけた。それに驚いて松の梢から二三羽、鳥が騒いで立つた。

水之助は口を刮とひらいた、赤い舌と白い歯がみえた。「あッ」といつたらしい口の形である。體を早速に沈め、左手で大刀の鐔際つかんで源藏の腮に突きあげた、が、届かないで、源藏の斬りつけた刃が眞向に外れてその鐔に切りつけ、火花を二つ三つ立てた。

「えいッ」

源藏は二の太刀を巻きこみ、今度こそはと必死に斬りつけた。心のうちで叫んでゐる、「父上、兄上」と。

水之助の顔が眞青になり、眼はぎら／＼光り、右手がさつと脇差にかゝつた。その左の首根に

源藏の二の太刀がはいつた、が、切先だけに過ぎない。血が一條、ぶつと噴き出した。

斬られたとき水之助は眼をぎよろりとさせ、右手の肘が動いて、袖の陰で刃が一二寸光つた。

源藏が三の太刀を巻返して斬りつけた。水之助に脇差を抜かせたくないのである。水之助はうしろへ反つて、源藏の三の太刀を避けた。脇差はまだ抜ききれぬ。

濠の向ふの阿野田のあたりで、霧を衝き破つて日が太く一筋映した、その餘光で水之助の青い顔の小皺一ツの動きまでが、明々と見える。

半藏がその時うしろから迫つて、大音聲で、

「親兄の仇、覚えてか」

と、水之助の頭へ斬付けた。水之助は源藏の攻撃を避けんと、うしろへ反つたばかりの處を斬りつけられ、ふらくと斜うしろに倒れかけた。脇差がそのはずみに五寸ばかり光つた。

「えいッやッ」

前から拳をさげて源藏が斬りつけた、刃は脇差の鞘に當り、鞘が割れて、その一片が飛んだ。脇差の身がそっくり見える。

水之助はふらりとして、今にも倒れさうである。

半藏は二の太刀をふるつた。

「やッ」

が、刀の鞘にあつた、音がした。

水之助が倒れた。兩眼はあいた儘、齒がすこし見えてゐる。

源藏と半藏が、乗しかかつて、刀を擬したが、何といふ事なく、手が下せない。少刻、ぼつねんとした。

「兄上」

「おッ」

源藏が身顛ひして、かねて教はつてゐた通り心臓を刺した、が、ちやりッといつて通らない。

又刺したが矢張り通らない。三度目をやつたが矢張り刺せない。

固唾を呑んで見てゐた半藏が、狼狽して、

「兄上、下に着込みがあるのでせう、切り裂きませう」

水之助は敵持の武士としての心掛け怠りなく、往來のときは袴の股立ちをとつてゐたといふ、が、それは三之丞を返り討にしてから何年かの間で、源藏も半藏も、そんな處を一度も見ることがない。しかし、鎖帷巾を着用するぐらゐの事はしてゐるかも知れない。

しかし、上着を裂いてゐたのでは手間取る、といつて、刺止をささねば武士の疵となる。

さうしてゐる中に番所の足輕が駈て來た。

源藏が三度まで胸に刃をさしたのに、倒れた儘、水之助はちツとしてゐる。或は死を撈つてゐるのではないか、さもなければ、今は氣を失つてゐるが後で蘇生するのではないか、かういふ疑懼が持てたので、近づく足輕を眼中に置かず、

「兄上、早く、刺止、早く」

「うん」

普通の刺止を兄弟一緒にさした。半藏は左から源藏は眞上からおなじ處へ。

源藏は水之助の傍に額ぎ、合掌して、

「南無・性海以得居士」

と、亡父石井宇右衛門の戒名を唱へた。半藏は兩眼から涙をはらはら流し、

「兄上、三之丞兄上」

と、泣き叫んだ。十歳のとき見た兄三之丞の顔が、閉ぢた臉のうちに浮いて出てゐる。

源藏は童のやうに泣いて、

「孫助、見てくれたか、孫助々々」

と、咽び泣いた。

番所の足輕二人が、サツと薄れた鬘の中で、ぼかんと見詰てゐる。その前に水之助の仲間金平が、眼を剝いて睨んでゐた。

やがて、金平がすこし腰を曲げて、一足進み、二足進みして、

「こらく。やい、こら、何でおのれ等は」

据はらぬ聲で詰問をはじめた。

源藏半藏はわれに返つた。半藏が、

「赤堀が仲間か」

「おう金平だ。おのれ等はよくも」

と、脇差を抜き放つた。

「うぬ、敵對するか、斬るぞ」

と、半藏が向かつて行く前に、源藏が立ち塞がり、

「赤堀が仲間、よく聞け。狼狽て聞き損じたか、われ／＼兄弟は、父兄の仇敵と名乗つて、水之助を討止めたぞ」

「えッ、敵、敵、敵討か、へええ」

「その方、逸早く逃げたと見える」

「夢中で、石坂御門の方へ駆たが、引返したら、この有様だ」

と、口の中でぶツ〜いひながら、脇差を鞘に納めたので、源藏が、

「敵對すれば斬るより他なし、敵對せぬなら、早々に歸れ」

「おう歸る、歸つて、ご主人様に申上げる」

と、いひは云つたが、歩かうとしないので、源藏が、

「怖いか。怖がらずに、それ、前を通つて行け」

と、道をあけた。半藏も道をあけた。金平は眼を閉ぢて駆抜け、振り返り〜去つた。

源藏が四邊を見廻した。番所の足輕が二人とも怯んで黙つてみる。

「半藏、帯の書付を取り出せ」

「はい」

「馳せつける者の有無は兄が見張つてゐる。落付いて出せよ、裂きでもしては、いかにも狼狽へた如くで面目ないぞ」

「はい」

半藏は帯のくけ糸を切り、中から書面を出した。

足輕の一人が、勇を鼓して、三四間に近づいてきて、

「その方ども、これ、その方共」

「はッ」

と、源藏が答へた。足輕が、

「その方ども、何として赤堀殿を殺害たか、仔細を申せ、仔細を」

源藏は三方に眼を配りつつ、答へた。

「この者はわれ〜兄弟の父と兄の敵でござる」

「確にさうか」

「左様」

と、源藏は多くをいはぬ。何處からか家中の士が飛び出してくるに違ひないだらうから、邀へて闘ひ、所詮は斬死と、一寸先のことが定まつてゐる。半藏が、

「兄上、書付を死體の袴に挟みました」

水之助の袴の紐に一通の書置が白い。

石井兄弟が水之助の死體に残したは、次の文面のものである。

一、赤堀水之助儀、我々親並に兄の敵たるによつて討ち捨て、本意を遂げ候也。即ち江戸表に於

て御公儀へ訴へ奉り、何方にてなりとも本望を遂げ候様にと、御免を蒙り斯くの如くに御座候。

一、右の望み御座候故、當分主人へ深く包み、數年渡り並の(註・渡り仲間並といふこと)賤しき奉公人に身をやつし、今日の奉公隨分大切に勤め候故か、懇ごろに召使ひ申され候段、忝き次第に存じ候、毛頭、主人方に存ぜられ候儀にてこれ無く候間、後日、主人たるもの落度に思召候こと、御免蒙り度く存じ奉り候。

一、我々父は石井宇右衛門と申し、青山因幡守大阪御城代相勤められ候時分、私ども親も大阪に相勤め居り申候處、この水之助の時分は赤堀源五右衛門と申し候、源五右衛門親を遊閑と申候て、大津に浪人にて居り申候、この遊閑に私ども親と由緒これ有り候故、源五を頼み越し申候に付、即ちかくまひ置き、いろく武藝を勵ませ、この者進退のこと苦勞致し居り申し候處、その時分源五右衛門方々へ槍の師を致しまはり申し候に付、父宇右衛門申候は、その方槍の師を致し候、事心許なく候間、今少し稽古致し候はば、尤もの由申聞け候へば、源五右衛門却て立腹し左様に心許なく思召し候はば、試合仕り見申し候段、是非なく試合仕り、源五右衛門は素槍の竹刀、父宇右衛門は木刀にて、何の手もなく源五右衛門の槍に付入り、少しも働かせず、打伏せ申し候が、意見申し、その儘うち過ぎ申し候、其

後源五右衛門、弟子共一兩人程もこれを承り候に付、面目なく存じ候か、宇右衛門を怨み、夜中他所より罷り歸り候處を、くらがりより素槍にて言葉もかけず突き申し候、宇右衛門槍を手繰り候へば、日頃の働きに怯れ候か、突きすてに致し立退き申し候、その時分我々共の兄兵左衛門(註・三之丞の變名八木兵左衛門をいへるなり)因幡守近習相勤め泊り番にて居合はさず、我我年五歳と三歳(註・六歳と三歳の筈なり、傳寫のうちに誤りしならんと云ふ)の時分に候故、落延び申し候、その節源五右衛門書置には、宇右衛門妻病死いたし妻これな々に付、縁組取り組仕り京より呼び寄せ申し候筈に致し候處、父宇右衛門分別かはり變代に仕り候故、申譯これなく斯くの如く致し候など書置申し候、定めて御家にても左様の申しなしにてこれ有るべく候、これより兄兵左衛門因幡守方を暇を取り、狙ひ廻り候へども深く隠れて行方知れ申さず候に付、右遊閑を討取り申候はば是非なく逢ひ申すべくと、私共兄は、遊閑を江州大津にて打捨て申し候、それより互に狙ひ八ヶ年過ぎ候て、美濃に兄の誼みの者これ有り、暫く滞留仕り候處、源五右衛門、承り彼の地に忍び入り、うしろより欺し切りにいたし、やうく兄抜き合はせ源五右衛門股を突き候へど、深手故働き無く終に討たれ申し候、それよりこの様子を以て御家中へ召抱へられ、御城内へさし置かれ、町町領分在方まで彼の者方人(註・援助者のこと)申す様と仰付けられ候こと、千萬是非な

き儀に御座候、その後我々ども年月過ぎて兄弟年立ち、仕寄り狙ひ候へ共、緊密の御かこひ厳しく、或は商人その他に身をやつし、かしこ此處と徘徊致し候へども、終に討ち得ず、甲斐無くしてやうやう四五年以前より、一人は御家中の面々へ渡り並の草履取り奉公人となり、なりふり深く謹み、心掛け候へども、今一人兄源藏一所になり難く、やうく今年まで相待ち、一所に罷り成り、兄弟ともに只今年來の本望を遂げ、會稽の恥を雪ぎ申し候、愚筆、荒増し斯くの如くに御座候、以上。

元祿十四年己未五月九日

石井源藏吉時  
石井半藏時定

板倉周防守様

御家老中御披見下さる可く候

足輕は棒に縦るやうにして、水之助の死體の袴に挟まれてある書付を覗いた。書面は抜いた儘だから手も觸れないで讀める。

もう一人の足輕が朋輩に近づいて、

「判つたか」

「敵討らし」

「赤堀殿が、敵か」

「この文面ではさうらしい。それ、赤堀水之助儀、我々親並に兄の敵と書いてある」

「どれ、ほほう。江戸表に於て、御公儀へ訴へ奉り、何方にてなりとも本望を遂げる様にとある。すると、正に敵討だな」

石井宇右衛門が討たれてから廿九ケ年目にあたる。赤堀水之助でさへ、忘れたではないが油斷が出てゐた。況んや、赤堀の身内でもない足輕では、多くの世間の人と同様に、そんな身の上の水之助だつたかどうか、この頃では噂のタネにもなつてゐなかつた。

それと、もう一つは、目前の出來事の責任を果す氣のない足輕だつた。氣の利いた足輕だつたら、何とでもして石井兄弟を抑留するか、もし兄弟が應じなければ鬭ふか、鬭つて傷つくか斃れば、一藩の衰め者になるに極まつてゐるが、それがこの二人には怖い。

「敵討なら尤もなことだ」

「さうだ、敵討なら尤もなことだ」

と、臆病を同情で庇ひ、兄弟の方を二人とも見ずにゐる。

源藏は血刀を拭つた。眼を足輕に放さず、すぐにも斬りつける氣になつてゐたが、足輕が視線

さへ向けないので、心のうちでは安心した。

が、安心ならぬは、目の前にある板倉全右衛門の屋敷の人々だ。霧のある朝とはいへ、その頃の武家で、その時刻まで睡つてゐる者はない、起きてゐるとすれば、たれかが心づいたに違ひない、だとすれば、家中の者を討たせて敵討だつたかと、知らぬ顔でゐる筈がないから、表門から押出してくるか、裏門から押出してくるかであるに違ひない。板倉全右衛門は三千石、家來の數もすくなくない。

源藏は帯のくけ糸を抜いた、水之助の死體にのこしたのと同じ文言の一通を、帯に挿し挟んだ。斬り刻まれて果ても、水之助討取りの理由だけは、さうして置けば判るだらう。二通が二通とも、風に飛び走りもしないだらう。心なき人の手にばかり引裂かれもしまい。

半藏が兄の左り手を掴んで、

「兄上、こちらへ」

「うん、引揚げか」

「板倉全右衛門様お屋敷のうちは、森閑として居ります」

「今まで、何ともないは、此方の仕合せだ」

「今のうちです、早く」

「應。引揚げる」

この邊の地理は半藏の方が詳しい。半藏が先に立つて行く後から、源藏はあとを振り返り、左右に眼を配り、追撃の有無を確かめつつ、怪まらない程に急いで歩いた。

出勤の藩士二三人に出會つたが怪みもしない。摺れ違つた。

霧が晴れた。紅を刷いたやうに日が照つた。

兄弟は肩を並べて歩いてゐる。斬つて出るものがあつたら、二人離れずに闘ひ、斬り死の場所はおなじ處と、思ふ心が、いつか、手と手を、握り合はせてゐる。

黒門が近くなつた。足輕がそこにも二人、まだ交代前で詰てゐた。

半藏が兄にそつと、

「兄上、黒御門さへ通り抜けければ」

「その次に京口御門、そこも無事に通り抜けられたら——半藏、急げ、兄に任せてお前は構はず、御門を駈抜けろ」

「それで兄上は」

「計略がある、任せて置け、さあ駈ろ」

足輕が濛い眼で目を仰いでゐたが、二人に気がついた。



と、源藏がうしろから、尖つた聲で罵つた。

「何をのそく歩く、駈ろく。ご主人に遅いとて又叱られねばならぬ。この間抜けめ、何故に速く歩かぬ」

半藏は兄を振返つて、

「俺はいくらでも駈られるが、お前の足が遅いのだ、俺が駈ればこれくらゐ速い、よく見てゐろ」

と、いひながら、子供の駈くらべの如く走り出した。源藏が、

「それで速いつもりか、速いとはこのくらゐに駈ることを云ふのだわ」

と、遮二無二、駈た。

黒門の足輕二人は、源藏が森平で、半藏が伴右衛門、そんなことは知らないが顔を知つてゐる。で、

「こらく、御番所前を駈抜ける奴があるか」

と、軽く叱つたが顔は笑つてゐる。源藏は駈け抜けてから向き直り、

「ご免ください、急用でござりますから。やい、又のろく歩く、それだから叱られるのだ」

と、叱る眞似して駈出した。

石坂がそこからは見えない。何があつたか、この足輕は知らずにゐた。

兄弟は西町へ出た。町家の街でも、人の目を惹かなかつた。

陰曆の五月九日は日中が暑い、朝涼のうちに用足しに出るものがあるので街の人通りは尠くない。

街のものは朝の片影を歩いてゐる。石井兄弟は足下の影が黒く寫る日向を歩いた。半藏が、

「日陰を歩きませうか」

「いや、日向を行く」

「咽喉が乾いておゐるでせう。霍亂を起しますぞ」

「兄弟、兩人、隠れんに逃げたと、討人のものが後々いふであらう、それが残念だから日向を

潤歩して引揚げるのだ」

「成程、しかし、來ませぬ兄上」

「油断は禁物だぞ」

源藏はたび／＼後を振返つた。どこにも、此方へ駈てくる者がなく、どこにも人馬のあがる砂煙がない。

今ごろ、赤堀の屋敷は上を下へ騒いでゐるだらう。平井才右衛門の伴は才右衛門の死後、水之助の世話になつてゐるから、第一に駆付けるだらう。假とはいへ半蔵には舊主人の子、追つてくれば斬る、斬るは兄の役、弟には斬らせられぬ。それに水之助の門人も駆付けるだらう。石坂の足輕も、さう／＼は死體を見ても居なからう。兄弟の姿が見えなくなると、怖いものがなくなつたので、事件の届けを活潑に急ぐだらう。藩としてこんな場合、打棄て置かないのが意氣地である。追討させずに置くものではない。

が、町家街は和かで笑ひ顔の人が多い。討人を引受け、今にも斬り死と覺悟の二人が通つて行く、そんな朝とはみえない。

兄弟はやがて京口門の阪へ近づいた。西新町の西の端にある冠木門を外へ出ると、長さ六間半、幅二間半の橋が川に架かつてゐる。そこを渡つた處を野村といひ、その先は野尻、落針、その先は關、阪本からサツと京都への街道である。

と、半蔵が、

「困つた男がきました兄上」

「何」

門を出てこちらへ来る男が一人ある、半蔵を見てにや／＼笑つてゐる。

この男は「小姓廻し」とそのころいつた、武家の口入をするもので、源藏も顔見知りである。

### 討人追人

板倉奎右衛門はその朝、いつもと變らず、燈火の下で食事をした。早起きだ。さうして簡短な食事である。

「ほう、けさは露が深いなう」

だれにともなく云つて廊下へ出た。露はむく／＼雲の如く奎右衛門を包んだ。

大柄な奎右衛門は肩衣袴でも堂々としてゐるが、甲冑をつけたらさぞ立派なことだらう。

奎右衛門は窓からさす明りで讀書してゐた。が、讀んではゐない、何をか考へてゐる。

板倉家もその他の諸侯とおなじく、財政が豊でなかつたので、領地の金持に金融をさせてゐた。家中一の名門で執政である奎右衛門は、今、仕切りに遣り繰り暗算中だつたのである。

家老といふものは一面では、いつの時にも、開發者の立場にもゐた。

六ツの太鼓が聞えたが奎右衛門は考案に耽つてゐた。素より、屋敷の前で敵討が起らうとして

ゐるとは、知る筈がない。時計のないころなので、晝ならば日を仰ぎ、夜なれば星を仰いで、時刻をはかることは、だれ

でも出来た。雨、曇りの晝や、暗い夜は、勘でゆく。

やがて出勤の時間をはかつて衣服を更へた。帯を結んでみると、家來が急いで来て、  
「申上げます」

「おう」

「お屋敷に近き、左り斜の松の下にて赤堀水之助殿が殺害られました。今し方のことにご座ります」

「さうか、で、何者が」

「番所足輕の申しまするに、一人は若黨風、一人は仲間風、どうやら兄弟らしいとの事にござります」

「水之助は、負傷か」

「即死にご座ります」

「さうか」

赤堀水之助は敵持だつたといふずつと昔の記憶が浮んだ。奎右衛門は袴をつけながら、

「殺害たる譯は、判つてをらぬか」

「赤堀殿、死體の上に、この一通が残してご座りました」

「血がついてゐるな。披け」

「は」

奎右衛門は石井源藏半藏の連署したる書置に目を通した。事情はそれで明白になつた。敵討に相違ないが、さて、討人をどうするか、追ひかけさせて討取るのが一般のやり方だつたのであるが。

「その書置を元通りにして參れ、それから——いや、よろしい」

何かいはうとしたが止めた。

奎右衛門は机の前に再び坐つた。何をか考へてゐる、藩の財政のことである。たつた今あつた敵討のことは、聞か、かつた如くである。

やがて、奎右衛門は屋敷を出た。若黨、仲間、一人づつ二人が、供をしてゐる。

門の左り斜に足輕が十二人、脊を死體に向け半圓をかいてゐる。その内側に倒れてゐる水之助の袴だけがみえる。血が黒く少し許りついてゐる。

死體の傍から三人、武士が立ちあがり、足輕のうしろから出て、奎右衛門に近づき、

「赤堀水之助、討られました。誠に以て残念至極にござります」

「さうだとなら。疵は」

「三ヶ所、ござります」

「首の付け根に一ヶ所、この邊のところでご座ります。これが一ヶ所、頭に一ヶ所、あと一ヶ所は刺止にござります」

と、いふうちもその武士達は、「汝、参つて石井兄弟を討て」といふ命令を待つごとく、左右衛門の顔から眼をはなさずみる。

左右衛門は聞くだけの報告を聞き、問ふだけの答へを聞くと、さつ／＼と登城に向かつた。現場にゐるだれにも、追撃を命令せぬ。

城から現場へ急ぐ三四人の家中の士に出會つた。その四人とも左右衛門に敬禮し、答禮された後、尙立つてゐた。この人々も亦「汝参つて石井兄弟を討ちとれ」と命ぜられるかと待つたのである。

左右衛門はさつ／＼と歩いた。

一人、二人、公用で行く家中の士があつた。それらにも左右衛門は敬禮に答へたのみである。

爪先のぼりになつてゐる石坂が盡きたところで、うしろから駈てくる者があつた。若黨と仲間、は振返つたが、左右衛門は振返らずにゐる。

足音が近くなつてびたりと止んだ。始めて左右衛門が振返つた。そこには卅二三歳の精悍な面

構への武士が、片膝を地に突いてゐる。荒瀧三五左衛門といふ家士である。

「失禮ご免。赤堀水之助、討たれました」

「それが」

「拙者儀、赤堀と懇親にござります」

「さうだつたなあ」

「赤堀水之助方には仇討に相應しい者がござりませぬ。平井才右衛門の伴は又従兄弟に相成りますが、病身にて不向き、と、他に、一人もござりませぬ」

「それで」

「拙者にお命じを、偏に、願ひあげます」

「石井源藏、半藏の追人か」

「はい。是非ともお願い申上げます」

「ふうん」

「是非」

「ふうん」

「水之助の追善にも相成ります」

「成程」

「水之助の門弟二三をも加へて参りたく存じます。この儀、お目滾し願ひあげます」

「こらく、既に、追手を命ぜられた如くにいふな」

「は。これは、恐れ入りました。何卒お願ひお許しくだされて、水之助の幽魂を慰めさせて頂きたく存じます」

「三五左衛門」

「は、有難く存じ奉る」

「早合點するな、まだ命じてをらぬ。かういふ時には、水之助の追善に相成るとか、門弟を差加へるとかは云はぬものだ」

「は」

雲行きがどうも良くない、本右衛門は討人をこの男にも許さぬ氣らしい。

「板倉の名折れに相成らぬやう、追ひかけますと云ふものだ」

「は」

「水之助の爲になぞとは未熟だぞ」

「は」

「板倉の家中の士を討たれて闇々と討手を取り逃がした。敵討故、わざと、見逃してやつたでもなく、手廻りかねたるが石井源藏半藏の勿化の仕合せと、世に評判されては、御家名の疵に相成るとでも申すならまだしも、水之助の幽魂を慰めるなぞと、あからさまに云ふてはなう、わしはうん／＼と聞き流すが、事むづかしい家老だと睨まれるぞ」

「は」

いよ／＼これは脈がない、討人の役は本右衛門の胸中に、既に極まつてゐるものと三五左衛門は思つた、と、本右衛門が、

「それでは、荒瀧三五左衛門、その方に石井源藏半藏と申す者の追人を申付くる、三番足輕十五人を率ゐて早速追へ」

「はッ」

三五左衛門は喜び餘つて見る見る赤くなつた。

颯爽として行きかける三五左衛門を呼びとめて、本右衛門が、

「こらく。目付は伊東規矩平に申付くるによつて、その心算でをれ」

「ははッ」

三五左衛門は飛んで行つた。

左右衛門はそれを振向きもせず、二の丸門さして行く。松の下道で、立停まつた。前方から伊東規矩平といつて、四十二三歳の丸顔で細い眼。どこかぼヤツとした中肉中脊の家士が、やつて来たのを見たのである。

伊東規矩平はゆつたりと歩いてゐる。今の荒籠三五左衛門とは恰度あべこべだ。

左右衛門が待合はせてゐる。その近くへ来て規矩平が、慇懃にゆつたり一禮した。

左右衛門は答禮して置いて、

「何處へ行く」

「はい。後學の爲、赤堀水之助の刀疵を見にまわります」

「ご用を申付けるぞ」

「はッ」

規矩平が地に片膝を突き、頭を下げた。左右衛門はぢろりと一瞥をくれ。

「家中赤堀水之助を討ちたる兩人の者、追人を只今、荒籠三五左衛門に申付く、伊東規矩平儀はその目付たるべし」

「はッ」

「三五左衛門の率ゐて行く足輕は三番十五人だ」

「三番の十五人、はッ」

「水之助を討つて立退き中のものは石井源藏おなじく半藏と申し、兄弟だ」

「石井源藏、おなじく半藏」

「さうでは無い、石井源藏、石井半藏の兩人だ」

「石井源藏、石井半藏」

「さうではない、源藏に半藏だ」

「はあ」

「何を顔を見る」

「おなじ事を何度も仰有る」

「うん、おなじ事をな、いろ／＼に違へてな」

「はあ」

「判つたか」

「とんと相判りませぬ」

「困つたな」

「手前も困りましたて座ります」

「さうか、困つたか」

「は——今一應お伺ひいたします。手前役目は」

「目付」

「目付。畏りました、が、今一ツ」

「何だなる」

「討人でござりませうや、追人でござりませうや」

「どう違ふな」

「手前の勘考にては、討人とお申聞けにござりますれば、石井源藏半藏の兩人、首にして立戻ります。追人とお申聞けにござりますれば、右の兩人、生捕つて連れて戻ります」

「わしは三五左衛門には追人と申聞けた」

「はッ。兩人を生捕り、曳いて戻ります。ご免」

「待て。おぬし、曾我物語を知つてゐるか」

「存じてをります」

「さうか。よろしい、参れ」

「はッ」

規矩平は三番足輕の屯所へ急ぎかけたが、左右衛門のいつた曾我物語が、何の意味か判りかねてゐる。仁田の四郎のごとくあれといふのか、御所の五郎丸のごとくあれといふのか、判断がつかない。

そのうちに西丸脇にある三番足輕の屯所の前へ来た。

足輕は武装を整へて列をつくつてゐる、その傍には三五左衛門がちり／＼して規矩平を待つてゐた。

規矩平は整列してゐる足輕の中に、水之助の門人が三人まで加はつてゐる。それに氣がつくと、頭のどこかを叩かれたやうな顔をした。危く笑ひ出すところだつた。左右衛門の肚の底にあるものが、やつとこさで判つたのである。仁田の四郎と異なれ、五郎丸とも異なれ、かう、板倉左衛門は暗示したに違ひないのである。

三五左衛門は汗を流さぬばかりに、

「お役目ご苦勞に存じます。よろしくば直ぐにこれより」

「あ、ちよとお待ち願ひます」

「お話は道々」

「あ、ちよつとお待ち願ひます」

「猶豫は相成らぬ時かと存じます、曲者が遠く逃げ去つては討人の名折れとなります」

「いやお待ちなさい」

「然らば、失禮ながらお先へ参る」

「役目にてお待ち願ひます」

「何」

規矩平は一向に構はず足輕にむかひ、

「お役目大切に存じ、一段の骨折りを心掛けるべし。よろしいか。判つたら、仕度検めをする」

と、聞いて三五左衛門がむツとして、

「火急の場合、仕度検めに及びますまい」

「そこ許はそれにてご覽ください。手前は命ぜられたる通り致します」

「それでは曲者が逃げ失せます」

「そこ許はそこ許、手前は手前。これ／＼足輕共、水筒、兵糧を見せし」

そんな物はだれも持つてゐない。規矩平は呆氣にとられてゐる足輕の顔を、すらりと見廻はし、

「黙つてをるのは持たぬといふことか、それは迂濶千萬。今日のご用は追人である、石井なにが

しなる兩人を生捕つて連れ戻るのであるから、彼等兩人が逃げた處まで追ひかけるものと心得い。然れば、通り道に井戸を見つけ、乾いたる咽喉をうるほすが如き、悠暢をしてをられぬと心得い。日暮れ夜に入つて尙も搜索いたすことに相成るやも知れぬ、そのとき、飯の仕度なぞ農家に命じても急の間に合ふまい、されば兵糧の要意缺くべからず」

三五左衛門はちり／＼して、

「伊東殿、水も飯も、臨機の處置が出来ます、ご心配に及びません」

「いや／＼、かかる時こそ、實戦に準すべきです。めい／＼、水筒の要意せい、めい／＼兵糧の要意せい」

足輕は辨當持參で勤務に就いてゐるので、水之助の門人三名を除いて、十二人だけは兵糧が手近にある、が、水筒の要意がない。

漸くそれが揃つた處で、規矩平が又もや、云ひ出した。

「十五人のうち十二人分の兵糧か、後三人分はいかがして整はぬのか」

三五左衛門は眼に稜立てて、

「伊東殿々々、それではます／＼曲者が遠く逃げます。拙者、先に發ちます」

「いや／＼、ご一緒に参ります、手前は目付です」



「尙この上に手間取つては、取逃がしてしまひます」

「いや、兵糧持参の十二人、お率ゐなさい、残り三人は、兵糧の仕度整はば、後から参るもよし、當所にて待つもよし」

これで水之助の門下三名は、雑作なく、追人から刎ね出された。

かういふ事の一方で、京口門の坂下で、石井源藏半藏の兄弟は、小姓廻はしの知人に、「どこへ行くのだ今頃、二人揃つて」

と、話しかけられさうである。

この小姓廻はしは赤堀の味方といふではないから、構はぬやうなもの、今はさうでない、討人が追ひつくまでに、是が非でも、旅の者の往來する街道へ出てしまはぬと、兄弟共に討られたとき、あとに成就の噂を立ててくれる者が無い。

源藏が急に息せき切つて、荒々しく、

「御門の外で乗掛け馬を見なかつたか」

小姓廻はしは思はず釣りこまれ、

「いやあ、見なかつた」

「さうか、さては早、餘程行つたとみえる。伴右衛門、うんと駈けぬと追ひつけぬぞ」

と、いひ棄てにして源藏は坂をのぼり、京口門へはひつて行き、顔見知りの番人に、

「お早うございます、ご苦勞さま」

と、頭を下げてすつと通つた。番人は何の氣もつかず、

「いやあ、早いなう」

と、氣嫌がいい。

坂の中途では小姓廻はしが、

「伴右衛門、何だねそんなに眼の色を變へて」

と、さすがに少し怪んだ。半藏は口早に、

「なあにね、江戸赤坂のものが乗掛けで通つたので、立話をする事はしたのだが、別れてから矢念してゐた用を思ひ出したので、二人で追ひかけるのさ。追ひつけなければいいがな」

と、いひ棄てて坂をのぼつた。小姓廻はしが、

「ああさうか」

と、得心のいつた返辭を、うしろに聞いて半藏は、京口門の番人に、

「下村源左衛門若黨、有澤伴右衛門にご座ります、主人用事にて通ります、お通し願ひます」  
番人はちらと見ただけで、

「通れ」

と、いつた。半蔵も首尾よく城下から外へ出ることが出来た。

田畑と農家を左右にみて、蟬の聲、舞ふ蝶の街道で、兄弟は肩を並べて歩きつつ、

「兄上、芽出たく成就いたしました」

と、半蔵はぼろ／＼涙をこぼした。源蔵が、

「氣をゆるめる奴があるか、まだ／＼針の山の道中と心得ろ」

「思ひ残すことがありません、わたくしは即坐に息絶えても残念はござりません」

「馬鹿な、これからが大切だ。弟、龜山へ行く人が近づく、覺られるな」

「はい」

野村を過ぎてのぞき茶屋まで、二人は、駈けては歩み、駈けては歩み、討手と闘ふとき、息切

れが早くしないやうに、心に心をつけた。

野尻に近くなつて、うしろを振り返つてみたが、討手らしい者の姿がない。

「兄上、どうしたのでせう」

「来ぬな」

「不思議です」

「妙だ」

のんこの茶屋の前まで来た。のんことは禪僧の名で能古と書く。元祿二年だか三年だかに、

然とやつて来た能古が、奈良流の茶飯といふのをつくつて旅人に食べさせた。家傳だといふ趣味

噲、これも旨いといふので忽ち評判になり、東海道筋の名物に數へられてもう十二三年になる。

のんこの茶屋には閑雅な庭があつて旅人の眼を慰めた。

源蔵はそこまで来て立寄り、

「弟、この茶屋で憩んで行かう」

「それよりは先を急ぎませう」

「ではあるが——後が大切といつたのはこの事だ。半刻程ここで待合はせ、それでも來なかつた

ら更めて先を急がう」

「あ、さうですか。武士の骨頂を示せてやるのですか。憩みませう。憩むとなると急に腹がへつ

て來ました」

「さあ、朝のことで茶飯が出来てゐるかな」

これを庭に突ツ立つて見てゐた者がある。

源蔵は茶屋の門口で、

「茶飯がありますか」

と、尋ねた。小女が振向きもせず、

「て座います」

「二人前、くれぬか」

「お掛けなさい」

兄弟の方を見た小女は、何の怪むところもない。

源藏は平氣を扮ひ、

「おい弟、あるさうだ、掛けるがいい」

「はあ」

半藏は龜山の方を切りに氣にしてゐる。

搬ばれた茶飯を食ひながら、二人は、交代の如くして討人を見張つた。その態度が、小女にも怪と見えかして、庭の方へちよこちよここと走つて行きかけたが、朝の日の影を足許に曳いて、木彫の翁の面をつけた如き、能古老人が、小女の行く先に姿をみせた。

能古老人は小女を去らせ、往來へ出て、龜山の方を眺めて起つた。

兄弟は茶飯を大急ぎで頬張りつつ、能古から眼を放さず、討人の見張りにも眼を向けた。源藏

が、

「弟。茶屋のこの主に油断するな」

「心得てゐます」

兄弟は手早く食事を終はつた。半藏が、

「兄上。わたくしは討人を見張ります」

「よし。わしはこの主に眼を放すまい」

のんこの茶屋のこの主め、領主への忠義立てに何か企みを思ひついたのではないか、と、兄弟は疑つてゐるのである。

茶屋の前を往來する、上り下りの旅人が、だんだん多くなつた。源藏が、

「弟。旅びとの往來が繁くなつた。かうなれば、たとへ討人に討たれても、赤堀の事が、廣島、

名古屋、江戸へ知れぬといふ事はない。死すとも安心だ」

二人のひそく話、往來に立つてゐる能古の耳へ、はひつたとは思へない。

やがて、はひつて来て、能古が、兄弟に、

「茶飯はうまうご座つたかな」

妙なことを尋ねた。源藏が、

「名物だけあつてさすが、旨い」

半蔵は怒つたやうに、討入見張りの眼を、ちらとも動かさずにゐる。能古が、

「左様か、それでこの主も甚だ満足でござる。どうぢやな、食ふたら發つて行つては」

「いや、今少々憩んでから發つ」

「その方が、こなた様方のお望かな」

「何」

「怒つてはならぬ。何やら険しい顔つきの衆じや、ここで、ひよんな事になつては迷惑ぢや、で」

「これ主。われ／＼兩人、そんなに見えるか」

「見えますなう」

「見えるとは」

「掛けてござれ、起つには及ばぬことぢや。いや、起つたなら井戸端へ行つてござれ」

「え」

「年下のお方の手に、血がついてゐる、指の股になう。顔にも膏がひどい、洗ふてござれ」

この老人には油断がならぬ、すつ／＼と二人とも起つた。

源蔵は茶飯代を拂ひ、屹となつて、

「老人」

「はい」

「龜山にてそれがし等兄弟、敵討て、只今、立退くところでござる。定めし、板倉様ご家中は、討人を差向けられるに相違ござらぬ。討人を差向けられると知つて、ひたすら逃げのびたといはるるは後世への不面目、よつて、兄弟兩人、このあたりに踏止まり、討手が參れば斬つて斬つて斬り捲くり、最後は討たれるものと覺悟でござる」

と、いふ源蔵に手を振つて能古が、鋭く、

「阿呆な、何をいふのじやこの人は」

能古は軒の下に出て、源蔵を手招きし、

「立話をするにはここがよろしい。こなた様の仰有ることを、ここでするは間違ひでござらう。

さういふことは、領分境でするものじや」

「……………」

「こなた様の心のうちには見得がある、華々しくしたいといふ見得がなう。それを棄ぬといけぬ。灯に入る蟲となる。たれが褒めませうか」

「何」

「こなた様達が發足して後、龜山から人が見えたら、わしは申しますぞ、領分境まで行つて待つてゐると申されてご座るとな」

「成る程」

そこへ半藏が来て、濡手拭を兄に差出した。源藏は顔を拭つゝ、考へてゐたが、

「弟、聞いたか」

「聞きました」

「發つか」

「發ちませう。領分境で待合はせませう」

「では、さうする」

能古が、笑ひながら、

「どれ程の間、待たれるのでご座るな」

源藏が言下に、

「一刻ほどは」

「ほう、半刻でござるか。龜山からみえたら左様に申上げませう、半刻程は待合はすと申されて

ゐたと。さ、それではお發ちなされ」

「心盡しを受けました」

「しゃく。人馬の煙らしいものはまだ、何處にもご座らぬ。悠々と發たれませい」

「忝」

兄弟はのんこの茶屋を出た。半藏か、

「兄上、不思議でなりません」

「今の亭主か。あれは以前、禪僧だつたさうな。噂は聞いてゐただらう」

「それもですが、討人のことです」

「全く、不思議だ」

「もしや、どなた様か、われくを憐れんで、討人をわざと、のびのびになされて居るのではござりますまいか」

「さうかも知れぬ、さもなくては餘りの手遅れだ」

「どなたでせうか」

「今それが判るものか」

暫くして源藏が、腿をはたと叩き、

「はて、狼狽へた」

「えッ。何を狼狽へたと申されます」

「着替のことだ。要意して、先日、野村の百姓治右衛門方に預けて置いたが、とんと忘れて通り越した。しまッた」

「衣類の二枚ぐらゐ、よいではござりませぬか」

「衣類を惜みませぬが、狼狽へたのが残念でならぬ」

「いいではござりませぬか」

「良くはないが、今更、立戻つては、のんこの茶屋の亭主のいふ、灯に入る蟲だ」

「兄上、わたしも狼狽へてゐました」

「何をな」

「落着く先を承らうと存じつつ、いまだに承つてをりませぬ」

「そのことか。それは狼狽へたのではない、落着く先は二ツ極めてあつた、龜山での様子次第で、江戸口御門を抜け出るやうだつたら名古屋へ、もし又、京口御門を抜け出るやうだつたら京都へと」

「では、京都でござりますな」

「さうだ京都に一先づ落着かうよ」

「それから廣島へ引揚げるのでせう」

「SSや」

「廣島でなく、何處へ行くのですか。京都に永くゐるのではござりますまい」

「京都にさうくは居られぬ」

「と、何處へ」

「江戸へ行く」

「江戸へ、何しにですか」

「江戸へ行くのは」

と、源藏がいひかけた時、うしろの方で遠く、砂煙が一筋太くむくむく立つてゐる。

半藏が眼をきらりとさせ、

「兄上。あれど覽なされ」

「うむ、來たな」

「來ました」

「二三騎らしうござります」

「存外、小いな」

「撰りすぐつた剛の者ばかりかも知れませぬ」

「さう思へば間違ひない。弟、足場のよい處を撰べ。あわよくば討果して立退いてくれる」

「ここで討人を討てば、この上、待合はすことは要りませぬな」

「さうとも、嘗へ一人たりとも討人を斬り棄てれば、その後は、急ぎに急いで引揚げだ」

と、いふ兄の顔に活気が横溢してゐる、弟はそれにも優して嬉しげに、

「討人さへ討てば引揚げだ、さうですな兄上」

おなじ事を繰返していふ半藏に、討人を既に斬り伏たかの如き喜びが濃い。

源藏は胸を搦かれたやうに、眼を光らせ、

「われ、兩人が斬伏られると思へ。小人数でくるからは剛の者に違ひない。弟、生きられると

思ふは敗れの因だ、未熟だぞ弟」

半藏は黙つた。顔が青ざめた。

砂煙はだん／＼近くなつて、見詰てゐる兄弟の眼に、やがて映つてきたのはつづく砂煙もなく

たゞ一騎、白鉢巻、白袴が物々しく、見えつ薄れつしてゐる。

半藏はわつと歡聲をあげ、

「兄上、一騎です／＼、たつた一騎です」

一騎ならば兄弟二人で、競ひかかつて討つてとるに何の難作があるものかと、半藏は、早、速

へ討つ氣で駆向はんとした。

源藏も眉をひらいて、

「たつた一騎か」

と、聲が綻びたやうに笑ひ、弟のうしろから駆向かつた。

砂煙りを立てて、近づく馬乗の士の目鼻が、わかる程に近くなると、半藏が、

「兄上、彼奴の顔をご覽なさい」

と、振返つた。躍りあがり躍りあがる馬のすがたが、蹄の音とともに、飛びつく如く近い。

源藏は眼を割いた。見れば馬上の士の顔色が、餘りに青い。

半藏は人馬が近づいて十二三間となると、

「わたくし、馬を斬ります、兄上は人を」

と、低く叫んで刀に手をかけ突き進んだ。

「待て弟」

「何をいふのですか」

半藏は袂を捉へられたが、振向きもせず振切つた、その前へ源藏が飛んで出て、  
「待て〜」

「狼狽へたのですか兄上」

叱りつけて進まうとする半藏の胸に、手を當て、源藏が、

「違ふ〜」

と、叫んだ。

馬は躍つて兄弟の近間にある、立つ砂煙りが鼻を撲つた。

馬上の武士は血走つてゐる眼をきらりと、道端の兄弟に向けたが、

「はいおうウ」

と、聲をかけた。馬は風を旋いて兄弟の傍らを過ぎて行つた。

半藏はびつくりして、

「あ〜」

呆れて見送る眼に、逞しく動く馬の尻と、突きあげた尻尾とが、新しく立つ砂煙りに薄れて遠  
退き遠退きしてゐる。

「兄上何でせう、今のは」

「さあ、何處かの御家中だらう」

「餘程の大事とみえますが」

「馬上の人も馬も、満身、汗淋漓だつたが」

源藏は龜山の方を見た、朝の涼しいうち一里二里でもと、旅を急ぐ人ばかりが街道の上に見え  
るだけ、討人らしい形跡はない。

板倉周防守重冬が所領は、そのころ、河曲郡で五ヶ村、三重郡で五ヶ村、この二つ併せて九百  
石餘、所領の中心は鈴鹿郡で、七十ヶ村四萬五百石餘である。

源藏は考へごとをしてゐたが、

「弟、ここから左へ抜けよう」

「國境で、一應、待受けるのではござりませぬか」

「はじめの思案は、ここ關川から關へ、それから土山、鈴鹿峠の國境、峠茶屋あたりで待受ける  
といふのであつた、が、それはやめる」

「何故ですか」

「身を全うする爲だ」

「しかし、それでは國境で待受け、來るか來ぬか、先途を見届ける筈の初めの心と違ひませう」



「弟、兄のいふ通りせよ」

「は」

「伊勢近江の國境で待つも、伊勢伊賀の國境で待つも、待つはおなじではないか」  
「成程さうでした」

兄弟は滅多やたらに西南をさして歩いた。

日が高くなつたので、兄弟とも汗しといとなつた。

一里半ほど歩いたと思ふころ、源藏が、一軒あつた農家へ立寄り、

「湯があつたら飲ませてくれまいか」

と、いつた。そこは貧しげな様子だつたが人は深切で、喜んで湯をくれた。

「草鞋を二足わけてくれまいか」

それも快よくくれた。源藏が、

「わし達は津の御城下まで行くものだが、道を間違へてうろくしてゐる、どうだらう、椋本へ出る道を、一緒にきて案内してくれまいか」  
すると亭主が向ふの雑木林へむかつて、

「おうい〜」

と、呼んだ。

「何んだあね」

と、頭が林の奥で動いた。亭主が、

「この衆を椋本街道のみえる處まで連れて行つてやれよ」

「おう」

がさこそと林の中から、若い素朴な男が出てきた。源藏は錢五十文出して、

「草鞋の代もくるめて、禮の心だ、どうぞ納めて下さい」

「草鞋の錢は貰ふが、餘分は要らぬよ」

「さう云はずに納めてください」

「なあに、要らぬえよ」

と、いふを無理に納めさせ、若い男の案内で、十町ばかり行くと、松原が遠く見えた。若い男は、

「あの松原が椋本街道だ。あれへ出るには、それ、この路を行つてあすこで曲つて、あすこで又曲ると後は一本路だ、判つたかね。判つたらお暇する、氣をつけて行くがいい。お大事にならう」  
いふだけ云ふと、さつさと引返した。

「有難う。家の衆によろしくいふて下され」

と、源藏がいへば、若い男は振向いて、

「あい〜」

と、答へ、さつさと引返し去つた。

兄弟は目ざす松原へ出たが、源藏は、

「はて」

と、思案の眼を閉ぢた。顔が暗い、と、見て半藏が、

「何です兄上」

「他でもないが討人がくれば今の男達が、その人達なら椋本へ行くといふた、道案内をしてやつたと云ふに違ひない」

「それでは追ひかけて行き、斬りませうか」

「血迷ふな。弟、そちはこちらまで立退いてきたら、命が惜くなつたとみえる」

「打明けます、その通りです。龜山ではもとより命の有無を考へませんでした。のんこの茶屋でもさうでした、が、この静かな山の村から山の村へとくるうちに、命が棄たくなかと思ふやうになりました。未練が出て参つたのです、未練至極で恥しい」

源藏の顔がすこし歪んで、苦さうに笑つてゐたが、

「恥かしいと云つてくれるな、實はわしも、命が棄てたくなかつて居る」

「兄上も」

「さうだ。弱い人間は——しかしな、その弱さに甘んじてゐては末代の恥だ。弱いのを強きに振りかへぬと可けぬ。弟、命が助からぬ時がきたら潔よく棄ててくれ、兄もその時は潔よく捨てるから」

「はい」

「出来る限り命を全うするやうにはする。しかし、それが出来ぬ時は、敵討を永年かゝつてした男らしく最期を遂げるより他ないのだから、潔よく死なう。未練を他人に見せて死ぬのも、潔よく彼の世へ去るのも、死は一ツだ、さうだらう」

「さうです」

「汗潤にも立話をした、さ、急がう」

「そちらへ行くのですか」

「さうだ。椋本へは行くまい。あのな、われ〜は恰度、關と津をつなぐ街道を關川から横に抜けてはいつたのだ。この道を行くと、間もなく伊勢伊賀の國境へ出る。その先は加太、それから

柘植、住那見、その先は伊賀の上野だ」

「あゝ伊賀越ですか」

「こゝに一ツの憂ひは、討人が、心利いてゐれば、一手を關から楠原椽本とはいらせて探すだらう、一手は關から加太柘植とはいらせて探すだらう。困つた、加太も柘植もこの先にある」

「すると、出會うかも知れぬのですか」

「さうだ、出會うだらう」

「ご心配に及びませぬ、わたくしは潔よくやります」

「萬一の時は、兄一人では生残りませぬぞ」

「わたくしも、一人だけでは生残りませぬ、さうです、共々です」

無二無三に處嫌はず歩きまわること、四里餘り、

「兄上、こゝは宿驛でご座りますか」

「さあ、わしにも判らないが」

道傍に蜻蛉を追つてゐた子に聞くと、何か答へたが聞きとれない。

すこし行つて、小流れで洗ひものしてゐた女に聞くと、

「石垣だ」

と、答へた。石垣なら佐那具へはもうあと一里、伊賀の上野へは二里である。

「兄上、と、こゝは伊勢ではないでせう」

「伊賀だ」

「國境で待つ筈でしたが、來過きたのでせう、どうなされます」

「今更、致し方がない。こゝで、飯を買つて食はう」

「その間に、彼奴等がくれば、彼奴等の運が強いのだ」

「さうだ——どこかで飯を買はねば、腹がへつたぞ」

とある家で、飯を賣つてくれたので、兄弟はがツ／＼して食つた。

そこを出て佐那具へ向かふうち、源藏が道に面して雑木を削り、矢立の筆で、元祿十四年五

月八日石井吉政、石井吉時」と書いた。

「弟、生木だから墨が滲んだが判讀できるだらう」

「出來ますとも」

「これを以つて、國境で待つに代へる」

「成程。勇ましいことです、來るなら來いと云はぬばかりですな」

「さうだよ」

からくと笑つた。聲だけの笑ひで顔は笑つてゐない。  
とある原で、源藏は、

「おい、ここに坐れ」

「何ですか」

「お禮を申上げるのだ」

「お禮とは」

「わしが龜山の御家中、夏目八兵衛方へ奉公のとき、伊勢參宮をお許しくださらば給金に望みはなしと云つた、憶えてゐるだらう」

「はあ」

「兄はな、伊勢路をめぐり行商してゐるうち、伊勢大神宮へ、勿體ないが、商ひのついでに参つたのだ。そのとき、五十鈴川を越えて、神宮の御前にまゐり、跪づいたとき、身内がふるえた。何といふ事なく忝くなつてなあ。わしはそのとき、お祈り申上げたのだ。我が譽のため、我が名聞の爲、敵討をいたす者では決してご座りませぬ、もし、左様な心あつての事でござりましたら、天罰をお興へくだされませ。龜山城下を生きて出たいとは思ひませぬと、申上げたのだ」

「それでは、わたくしに下すつた、武運の御神符とは伊勢大神宮様の」  
「さうだ。こちらを向け」

「はう」

夏草の茂る上に兄弟は跪づいた。蝶、蜻蛉が、頭の上を舞ひ飛んでゐる。  
源藏はひれ伏して、

「わたくし共兄弟、久しき間の大望を今日達し、願ひ成就仕りましたる段、有難く存じ奉ります、のみならず、その場にも存命、道路の間も存命、只今に及んで尙も存命仕りをしますは、御加護を給ふに非ずしては無きことにご座ります。別してわたくし儀は、十五歳にて廣島を出でて以來、今日に及ぶまで、生きて龜山を出づることは無しと存じ、かねがね覺悟を据ゑをりました處、かく存命のこと、偏へにお助けによることにご座ります。わたくし共兩人、無事立退き、何方へまゐりましても、一ヶ年に一度、必ず代參を以てなりと、一生涯、お禮申上げ奉ります」

と、拜禮してゐるうちに源藏は、切りに落涙した。半藏も泣きながら、  
「わたくしは伊勢の國にありながら、一度のお参りも仕らず、然るに、兄同様、ご加護を以てお助けにあづかりました。兄同様、生きてある限り、一ヶ年に一度のお禮参りは代參を以てなり

と、必ず仕ります」

拜禮を終はると、兄弟は始めて明るい顔になつて笑つた。

その日、伊賀の空は、輝かしくも青かつた。

それより先、板倉家の伊東規矩平は、足輕の武装検査で手間どらせたのみか、ちり／＼する荒籠三五左衛門を、抑へる如く抑へぬ如く、城下を過ぎつて京口門へかかつたが、又手間どらせ

た。

「江戸口か京口か、それを確めてからにせい」

が、それはすぐ判つた。何分にも石井兄弟の顔の色といひ、歩き方といひ、見た者が後から思ひ合はせればすぐ判ることとて、その男達ならここを通りましたといふ者が幾人もあつた。三五左衛門は大聲に、

「遠くは行くまい、急げ／＼」

と、眞先に立ち駈出した。規矩平は心のうちで、

（それがしなら、馬で追ひかけるが、三五左衛門は徒歩で追ひつく氣か、ははは）

規矩平は人知れず瞑目して、皇太神宮のまします方に祈つた。

（兄弟の者、無事、立退かせ給へ）と。

この追人の一隊を見て、赤堀討たれの一件が忽ち城下に知れわたつた。

一人、この一件を知り、源藏が追はれてゐると聞き氣を失つたものがある。旅籠町の釜屋太郎左衛門の娘お米である。

### 敵討後

伊賀の上野の城下へ、提灯を手に／＼點して、石井兄弟がはひつた。

「弟、休息して行くか」

「左様いたしませう」

街の角の店で飯を買つて喰ひ、出立した。

「弟、疲れたらうな」

「はい、疲れました」

疲れもするだらう。八日の夜から敵討の朝へかけ、碌々、睡つてゐない上、水之助を討ち、龜山脱出をはかり、強行をやり抜いて、その夜又、一睡もせず歩いてゐるのである。

源藏も半藏も、氣を張り詰てゐるもの、ここは藤堂家の領地で、龜山を去つて遠い、最早、討人のかゝる惧れもない、と、いふ心の隙間から睡魔が切りに襲つてくる。

「弟、溝川になど落ちるな」

「はあ、さういふ兄上こそ、お落ちなされますな」

「何をいふか、わしは大丈夫だ」

だれも居ない夜道で手を取り合ふと、どちらともなく、灯をにかけて、顔を互に見合つた。自づと感激が盛りあがつて来た。けさ敵討を遂げたことも、今かうして生きてゐられる事にも。

「兄上」

「弟」

急に泣きたくなつた。睡魔は一時その爲に去つたが、間もなく又襲つた。歩きながら二人とも睡り勝ちである。

ばたりと半蔵が提灯を落とした。はツとして拾ひかけたが間に合はず、めらくと燃えたので、踏消した。源藏はそれに心付かず、うつらうつら歩いてゐる。

上野から二里六丁餘の島ヶ原の宿へはいつたとき夜が明けた。半蔵が、

「兄上、わたくしは最早一步も出ません。どこぞへ泊らせて下さい」

「うむ、わしも怖へられなくなつた。泊らう」

安さうな宿をとり、食事もとらず、睡込んでしまつた。宵に一度眼をさましたが、すぐ又寝込んで、十日の未明、泊り合はせの人の發足する。聒しさで、はつきり眼がさめた。

兄弟は島ヶ原を出て、伊賀山城の國境を過ぎ、笠置峠を越え、一里半餘り歩いた。

「けふは元氣だなあ弟」

「はあ。兄上もよくお睡みでした」

「前後不覺だつた」

「ああいふ時に討入られたら、手を束ねて彼の世へ行きます。それを思ふと、今更ながら身の毛がよだちます」

「全くな」

北笠置を出て舟場を尋ねた。山背川（木津川）の小舟で淀川へ出て伏見に行き、京都へはひる心算である。

十日の午後、京都へはひつた兄弟は、大阪の親族縁者と、廣島の一族一門に、敵討の様子を書いて飛脚に託したが、

「さて半蔵、明十一日の早朝、當地を發つて江戸へ向かふから、その心でゐろ」

「あすですか」

「うん、息吐く隙もなく發足するは、一ツには計略、一ツには武士の道を貫ぬく爲だ。その譯は——計略と申したのは、龜山の面々は、今ごろ定めし、關川から横に切れ、伊賀路をさしたわれわれの足跡を調べて存じてゐるだらう。伊賀越をしたとあれば落着く先は大坂か、又は、それより西の方と、かく、思つてゐるに違ひない。さう思はせて置いて、われ／＼は、今一度龜山を通行し、江戸へ行くのだ」

「えッ、再び龜山へ」

「さうだ、龜山を今一度、突き抜けて通るのだ——怖い。怖いとはいはさぬぞ」

源藏は力を言葉に罩めて、

「更めて龜山を通るは勇氣を銜ふに似てゐるが、さりと道を違へて、龜山を避けては、怯ぢたるが如くで無念である。半藏、手段を以つてすれば、敵の重圍の中とて、よも、通り抜けられぬ筈はない。兄に任せ、安心して來い、必ず、白晝易々と龜山を通らせてみせる」

「參ります共、兄弟一ツならば、死ぬも生きるも、心安うご座ります」

「決心がついたか」

「はッ」

「それでは今一ツ決心してくれ」

「何んでご座ります」

「他でもない、水之助の弟のことだ。一人は大坂に在ると聞く、一人は讃岐にあると聞く、この兩人それ／＼に、兄水之助の敵とわれらを狙うは天下法度の又敵ながら、意氣地づくにては法度を怖れず、随分、付狙はぬものでもない。まこと、付狙ふ所存ならば、尋常に出合ひ、勝負を決してやる心を明かに知らせてやる心算だ。彼等兩人、又敵を討たず、とあれば、それにて始めて、石井赤堀の争ひは終りとなる、もし又、付狙はずと稱へて、不意を討たんとする心ありと見たときは、押かけて斬つて棄てる。その始末が付かぬうちは、兄弟共に、身の落着はつけ難い——判つたな弟。今一度、血を見ぬことには落着とはならぬのだ」

「兄上、さてさてお見上げ申しました」

「何と云ふ」

「我兄ながら御立派です」

「それではお前も喜び勇んで、今一度、血を浴びてくれるか」

「申すまでもご座りませぬ」

「よく云つた。その所存あつてこそ、天下に聞えて恥しからぬ敵討の始め終りだ。わしはさう思つてゐた、敵討とは、討つ時も立派でなくてならぬ、が、討つた後が、萬端、爽かでないと思

らぬ。本意は達したが、そのあとで、物性ちして、人に會ふを厭ひ、苟の外出だに嫌ふのは、穴に隠れる蟹同然だ。わしとそちとは、そんな敵討の討人になりたくなし、させたくない」

「兄上、よくよく合點が参りました」

「さうか、それは嬉しい」

その翌朝、京都を發つた兄弟は、江州大津で買物に手間どつた。

「兄上、妙なものを買い集められてどうするのですか」

「今に判る」

途中、人なき處で源藏が横道にはひり、買ひ集めた古着その他を按排して、半藏の身に着かせ

「今日からは、お前もわしも飛脚だ」

「あツそれで、成程」

「永らく行商人をいたしてゐたので、自然と古着その他にも目が利くやうになり、さては又今の如く、身拵ひの工風なども、雑作なく出来るやうになつてゐる。これでは町人になつても一家を支へて行けるかも知れぬ」

さう云つてゐるうちに、手早く變裝の成つた源藏は、

「弟、手紙を書け、手紙もたぬ飛脚はないからな。わしの書いたのはお前が持つて、お前が書いたのはわしが持つ」

往還へ、ひらりと出たこの二人の飛脚は、草津へ向かひ、石部、水口、土山、鈴鹿越えして阪の下、それから關。關は、龜山の板倉家の金融を承つてゐる橋爪家があるので、龜山の士がよくやつて來るところだ。

幸ひ、關では何ごともなかつた。關川では感慨の深いものがあつた、が、二人の飛脚は素知らぬ顔で通つた。

のんこの茶屋の前では二人とも、ちらと店を覗いてみたが、能古老人の姿はない。奥で、茶でも點じてゐるのだらう。

程なく龜山である。

源藏は先、半藏は後、二人は別別のごとく、飛脚らしく歩いた。飛脚の足のはこびを源藏が知つてゐたので、半藏も眞似て巧である。

京口門へかかつた。

源藏は髪かたちを變へてゐるので、判らう筈はないと思つてゐる、が、念の爲に、鬘の紐を強く結んでゐた。眼がつりあがつてゐて、顔つきが見違ふばかり變つてゐる。半藏もそのテを用



わた。

門番人は源藏が差出した手形をよくも見ず、

「通れ」

と、いつた、半藏にも亦、

「通れ」

と、いつた。石井兄弟が来るなどと、たれにしる龜山の者は思つてゐない。番人もそれである。

さて、それから城下である。

源藏は先に半藏は後から、飛脚らしく、さつ／＼と通り抜ける途中の街の角で、

「あらあ」

と、いふ女の聲がした。

源藏はその聲が自分のことに就いてだと氣がついてゐる、が、すた／＼と急いだ。逃げるが如くである。

半藏は兄のうしろだつたので、どういふ女が、何を見て聲を擧げたか判つた。その半藏も素知らぬ顔ですた／＼急いだ。

女はお米である。その傍らに笠屋九郎右衛門がゐて、共ども、二人の飛脚を、きよとんを見送つてゐる。九郎右衛門が、

「違うぞお米」

「さうかしら、でも、あんまり似てゐるもの」

「他人の空似だ。考へてみる、ああいふ一件があつた處へ、いくら何でも又やつてくる、そんな事があるものか」

「だつて、二人が二人とも似てゐるもの、人違ひとは思へませんよおとツさん」

「なあに、あの二人の衆がここへ來てみる、ヤツといふ間にフン捉まるか斬られるかする、それを知らない二人ではない」

「だつて、伊東様がわざと手間取つて、逃げられるやうにしたといふ噂ではないのかい」

「それはさうか知れないが、さういふ方ばかりお居でなさりはしない、見掛けたら斬りつけてやると仰有つてゐるお方もある。どつちしても今の飛脚は他人だ」

「さう云へば、あの人達がここへ又くる筈はありませんねえ」

「一生涯この地は踏まないだらうさ。なあお米、お前も身の振り方を考へるよ、可哀さうだが、森平は、二度とここにくる人ではないからなあ」

それとおなじやうに、半蔵が兄と話した。無事、江戸口門を出て間もなくである。

「兄上、さき程、あつといつた女にお心づきでしたか」

「うん」

と、源蔵が暗い顔をした。半蔵が氣の毒さうに、

「お心付きでしたか」

「お米さんだつたらう」

源蔵は汗を拭いた、眼のあたりだけは二度も拭いた。

二人の間の話が杜切れた。程経つてから半蔵が、しみくいつた。

「兄上、女の身は男より一倍、頼み難いものがござりますなあ。あの人は他所ほかの男と苦樂を

ともにすることになるでせう、亡き兄三之丞の許嫁だつた人のやうに」

源蔵はますます暗い顔をして、

「生涯の苦樂を他人によるものは女といふが——儚ないな男より、と申すはお米のことではな

い、今お前がいひ出した亡き三之丞兄の許嫁、市瀬伊左衛門殿といふ方の娘御のことだ、三之丞

兄は肌身放さず、許嫁の贈りくれし物を持つてゐたと聞くが、横死を遂げたので、その縁はぶツ

つり切れた。聞けば、何とやらいふ家へ嫁入つて間もなく死んだと聞いた。生きてご座れば今年

は四十五歳か六歳か」

「さうですね。三之丞兄上がご在世なら、四十八歳でせう」

「いや、四十九歳だ」

兄弟は尾張名古屋へ着いて、船橋松庵方に草鞋をぬぎ、翌日、出立しようとしたが風雨が強い

ので見合はせ、四日目に立出た。

最早、二人共、飛脚ではない、以前、預けてあつた衣服を着け、大小も帶し、浪人風俗であ

る。

今度は道を東海道にとらず、小牧稻置を通つて鶴沼へ出て、木曾路をとり、五月廿六日、武州

板橋に着き、名もなき宿に一夜を明かした。

翌日の未明、宿屋で、源蔵が、

「今日、江戸御町奉行保田越前守様へまゐるが、御用のご都合もあること故、差控てゐる時刻が

永びくかも知れぬ、保田越前守様相濟めば、松前伊豆守様へ参る。ここにも永らく時刻がかか

るかも知計り難いから、今日の食事は今この一食だけと思ひ、充分に腹拵へいたして置けよ」

二人とも可成り食つて、提灯片手に江戸へ向かつた。

常盤橋内の北町奉行保田越前守宗易へ、名古屋で書いて来た次のごとき「口上書」を差出し

た。五月廿七日ごがつにじちの朝あさまだ早い頃ころであつた。前任ぜんじんの北町奉行川口攝津守宗恒むきたまひらぎのつかさづつぬしむねつねは元禄十一年十二月一日退き、その後任こうじんが保田越前守である。

乍ついで恐口上書

亡父石井宇右衛門伴  
石井源藏  
石井半藏

私共わたくしども、親兄おやにの敵討かたきうち申まうしたき儀ぎに付つき、元禄十一年十一月十七日げんろくじゅういちねんじゅういちがつじゅうしちじちに願ねがひ奉たてり、御帳ごちやうに記しし置おかせられ下くだされ候まう、兩人ふたりの者共ものども、本望ほんぼうを遂まげ候まうに付つき、訴うへ奉たてり候まう。

右藏みぎざう、赤堀源五右衛門儀あかほりげんごえいもんぎ、赤堀水之助あかほりみづのすけと名改なをかめ、板倉周防守いたくらしゅうぼうし様に年來ねんらい召抱めしめへ置おかれ、勢州せしゅう龜山かみやまに罷かり在あり候まう、由承よしうけり候まうに付つき、彼かの家うち中ちゆうへ賤いやしき奉公人ほうこうにんに罷かり出でで、當月たうげつ九日くじち三さんの廓くわく石坂門いしざかかどの下したにて辰たつの刻とき、彼かの者番ものばん歸かへりを待請まちうけけ、私共わたくしども兄弟けいだいにて討留うりどめ申まう候まう、御公儀ごこうぎ様さま御威光ごゐこうを蒙かかり多年ねんの鬱憤うつぱんを解散かさん仕まつり、有難ありがたく存ぞんじ奉たてり候まう、因よつて茲こゝに憚はばりながら御禮ごれいの爲ため罷かり出で候まう、以上いじやう。

元禄十四年五月廿七日

石井源藏  
石井半藏

御奉行所様

當番たうばんの役人やくにんが一應おつの尋問じんもんをして去きり、兄弟けいだいは控所ひかへしよに下くだつて待まちつた。やがて呼出よびだしがあつて、保田越前守やまだえぜんしゆうしの用人ようじん友常左次馬ともつねさじまが、兄弟けいだいに、改かめて尋ねたづねがあり、兄弟けいだいは再び控所ひかへしよに下くだがつて待まちつた。

友常左次馬ともつねさじまが、やや暫しばく經たつて、再び兄弟けいだいを呼よび、

「越前守様御前えぜんしゆうさまごぜんへ罷かり出でますやうに」

と、いひ渡わたした。

二人ふたりが連つれて行いかれた處ところは白洲しらすである。縁通えんとほりに役人やくにんがでて席せきにつくと、保田越前守やまだえぜんしゆうしがはいつてきた。人品じんぴんのいい、色の黒くろい老人らうじんである。

役人やくにんが兄弟けいだいの差出さしだした口上書こうじやうがきを讀よみあげた。

森しんとしてゐて嚴おこかな白洲しらすに、役人やくにんの朗讀らうどくの聲こゑのみ高い。

と、越前守えぜんしゆうしが徐おそろに兄弟けいだいに眼めを向むけ、直接ちよくせつに尋問じんもんをした。

保田越前守やまだえぜんしゆうしは嚴おこかに、

「石井源藏いしゐんげんざうか」

源藏げんざうは頭あたまを下くだげた。

「石井半藏か」

半藏が頭を下げた。

「只今、讀みたる口上書に相違ないか」

「はッ」

と、源藏が答へ、半藏は無言で頭を下げた。

「勢州にての遂一を申せ」

「はッ」

源藏は言葉の飾りなど一切抜いて、簡明に、赤堀水之助を討留めた真相を述べた。越前守の顔に熱情がちらりと出たが、

「源藏半藏は何歳か」

「卅四歳にご座ります。弟、申上げし」

「半藏、卅一歳にご座ります」

「源藏は何歳より敵を付け狙うたか」

「天和二戌年、十五歳以來にご座ります」

「ふうむ。十五歳より今年卅四歳までか、ふうむ。して、半藏は」

「元祿元年辰の年、十八歳よりにご座ります」

「十四ヶ年に相成るなう」

「は」

「その方共は武運に叶ひたるものである、この度の致し方、首尾残るところなし」

兄弟は頭を下げて、禮の言葉に代へた。越前守が柔和な顔をして、

「さて、兩人共、これより何方へ参るか」

源藏が面をあげ、

「私共兩人、先づ御公儀の儀を大切に存じ奉り、一たん、京都へ引揚げましたれども、一夜

泊りしのみにて直ぐさま出立、昨夜は板橋に一宿仕り、今朝、参上仕り、先年御帳願ひ置き

ましたる故、憚りながら本意を達しましたる段お届け申上げ奉り、且つは御禮申上げたく参上

仕りました。何方へとも、いまだ、参るべき心當てもこれ無く。當御屋敷罷り出でますれば松

前伊豆守様へ参上、これ亦滞りなく相済みますれば、その上にて、何方へなりと参る心にご座

ります」

「京都よりの道中は、いづれを通りしか」

「は。京都より近江へ出で、東海道筋を通り、名古屋へ参り、風雨の爲、知邊の方に三晩泊り、

名古屋より木曾路を経て板橋へ」

「と、その方達は、敵討の後、再び龜山を通つたのか、それとも龜山邊は間道を撰みて通りしか」

「龜山を通行いたしました」

越前守の顔が屹となり、やがて、口許を綻ばせた。諸役人の顔には驚歎が出た。越前守は、

「伊豆守殿へ参り、その以後、何方へか定めし参るであらうが、その心當りはないのか。古主青山下野守殿へ参るとは思ひをらぬか」

「御意の如く、古主にござりますれば、青山下野守様へは、一通り御届け申上ぐべく存じまかりあります。落着きの儀は、只今、何とも考へござります」

源藏は水之助弟、兩人の決心の有無を確めねばならない、で、身の落着は、全く念頭がない。

「行くところなくとも、この後、如何やうにも出来るべし。段々、残るところなく、首尾一段のことなり、先づ役所へ参り居れ」

白洲を出ると役人衆の詰所へ連れて行かれた。そこでは、役人衆が兄弟を取りかこみ、口々に、敵討の状況を八方から競つて尋ねた。

それに答へてゐるうちに、友常左次馬が来て、更めて、敵討の様、勝負の有態、龜山に兩人

奉公中のこと、その時の主人の姓名など、詳かに尋ねた。

役人は耳を澄まして八方で聞き入つてゐる。

左次馬は兄弟の語るを、傍らから筆記させてゐたが、終ると、

「越前守様、ご覽なされます」

と、筆記を持って出て行つた。

やがて左次馬が引返して来て、兄弟に、

「越前守様仰せに、江戸にて参るべき處なしとは存ぜられず、とお尋ねでござる」

源藏がそれに答へて、

「町方にも知人ござります、武士にもござりますが、かかる時まゐつては、先方の心づかひある事故、遠慮仕ります」

「越前守様仰せに、親類はこれなきか、とお尋ねにござる」

源藏は當惑した。町奉行所の帳面に、届出で記載されれば、それで良い。後は、大阪四國へ走せ向かひ、復敵の埒を明けたいのである。が、ここまで尋ねられると、何とか答へなくてはならなくなり、

「は——松平安藝守様御家中に石井清太夫と申すもの、私共従兄弟にござります。この者もし江

戸詰にて罷りありますれば、暫く、江戸逗留を相談いたしみる心にご座ります。もし、江戸に居合はさずば、一先づ大阪へ又は西國へ参るべきか、只今の處、相定めかね居ります」

「越前守様仰せには、その方共に兄あり、大津邊にて赤堀方の者を討ちしと聞く、このたび差上げたる書付にそのことなし、とお尋ねにござる」

半蔵が兄に、

「龜山での書置、一通手許に残つてゐるのを、差上げては如何でござります」

源藏が首肯いて、帯の中へ入れてあつた書置を、取出して、

「その儀は事長く相成ります故、口上書に省きましてご座ります。この一通は、赤堀水之助討留め、死骸の上に残し、引揚げました一通と同文にて、些か相違もござりませぬ。これをご覧くだされなば、概略ながら、様子相知れませうと存じます」

「この二通、お目にかける。待たれい」

と、左次馬は出て行つた。

時經つて左次馬が来て、

「越前守様仰せに、この一通にて様子、具さに知れたり、とご座りました」

「は」

左次馬は起つて行き、近くにある祐筆部屋にはひつた。

「祐筆の衆、これへ。越前守様仰せに、この一通を寫し置くやうにとご座ります。様子にて、御老中様へも御覽に入れらるべきにつき、随分、入念に筆とる可し、紙なども吟味いたす可し、とご座ります」

「は」

答へはしたが、顔見合はせてゐるのみである。左次馬が奥へ去ると、

「拙者はどうもその」

と、尻込むものばかりである。

「これは是非とも貴所の麗筆でなくては叶ひません」

「いや〜。これはそこ許のご手蹟でなくては」

と、譲りあつてゐる。謙讓してゐるのでなく、阿部豊後守正武、土屋相模守正直、小笠原佐渡守長重、秋元但馬守喬朝、稻葉丹後守正通など、老中が怖いのである。筆蹟がよろしくないと一言いはれても、一晝違つてゐると指摘されても、縮みあがらねばならぬ事は避けるが得だといふのである。

そのうちに保田越前守が他行した、と、わかると、待つてゐたやうに先を争ひ、殆ど血眼同然

で、書置の寫しを取り始めた。

これが諸方にひろまつて、いろ／＼著述のタネにもなり、今も残つてゐる「石井源藏友將覺書」、又は石井兄弟の「覺書」である。

越前守が他行から歸つたが、寫しはまだ出来てゐない。この間二刻程、今の四時間である。漸く寫しが出来あがつた。

役人が「敵討の者願ひ帳」といふを取出し、石井兄弟の件りに、今度の届出での要領を添書して、「御帳面相濟み」となつた。

と、足掛け四年前、源藏が「御帳面」を願つて出たとき、懇切にしてくれた與力がやつて来て、

「さて／＼芽出たい事でごさつた。永年のご辛勞甲斐あつて、まことに芽出たく存じ申す。お、弟御はそこ許か、このたびは大慶至極。めでたい事にござる」

と、喜んでくれた。やがてその與力が、そつと、

「ご兩人には今早朝から只今まで御待合はせで、さぞかし御空腹のことと存じます。實は拙者共より焼飯にても進めてはと、朋輩共とも申してをつた處、越前守様お心付けにて、出来合ひの料理をご兩人に下さると承りました。追つつけそのことを申出づると存じますが、決してご辭退

なく、よくお禮を申上げ、料理お請なさるやうに」

「は」

敵討の者が、さういふ待遇を受けるものか、どうか、兄弟は知らない、が、優遇されてゐるとは判る。

與力が又囁いた。

「以前より御奉行所へ訴へに出でた者のうち、輕き料理にせよ、御奉行より申付けられたと承はつた事がござらぬ。おの／＼を越前守様には、懇ろに存ぜられたればこそでござる。さて／＼おの／＼には果報のことでござる。但し、これは、内證にてお傳へ申した」

「忝く存じます」

間もなく左次馬が来て、料理を下さると兄弟に傳へた。

源藏が禮をいつて、二人揃つて、案内に付いて行つた。その先は内玄關。

そこには洗足の仕度がしてある。兄弟はこゝで始めて草鞋を脱いだ。

口の間へあがると、案内の者が出てゐて、

「これへ」

と、導いた。

三ツの間を通つて、一間に導かれ、そこで料理をくだされ、酒も出たが、兄弟は酒を辭退し、飯をいただいた。

左次馬から、

「今晚の宿所定まり次第、處の名、姓名など、申越されたい」と、念を押された。

兄弟はけさからいろく好意を寄せて貰つた人々に、禮をいつて廻つた。外へ出たのは未の刻半ばである。

今の時間でいふと、午前五時ごろから午後二時までかかつた。

半藏は上氣して赤い顔を、丸の内の夏の風に吹かせ、いそぐ歩いてゐたが、

「兄上、思ひがけぬ上首尾でした」

「うん。お心盡しを頂いたな」

「今朝から只今までに、お目にかかり、祝ひ言葉をいただいた方々が、どれ程ござりましたらう」

「お前は、その人数をどのくらゐと思ふ」

「二百五十人程と思ひます」

「さうだ、二百五十人を下るまい」

「お料理をいただいてゐる時、數人お見えになつたのは、お役人でせうか」

「越前守様ご家來だらう」

「皆、麻上下着用でござりましたな」

「どなた様にも懇懃にして頂いた」

「發端以來廿九ヶ年かかりましたなあ、兄兩人のうち一人は返り討、一人は水死、慘々なる敵討と思ひ何百たび泣いたか知れませぬが、かやうに成つてみますると、永年苦辛をしたればこそ、他人様も良くして下され、お奉行所様にも、格別にして下されたので座りますな」

「弟、お前、半で敵討が厭になりはしなかつたか。わしはなつた、何十たびも。幸ひにその都度、思ひ返したればこそ今日があつたのだが」

半藏はどきりとしたが、すぐ笑ひ出した。

「わたくしも左様でした。敵討とはこんなに辛いものか。武士の子に生れねば、父兄を討たれても、討つた者を怨み憎むだけで、かうまで辛くせずともよからうなぞと、愚痴になつた事が多うござりました」

「さうか。わしは、途中で、よくぞ變心しなかつた自分に、禮がいひたいくらゐだ」



「わたくし一人でしたら、恐らく變心してゐたでせう」

「わしだとして一人であつたら、本物の行商人に成つてゐただらう」

「お米さんの夫になつてですか」

「馬鹿め、ははは」

「ははは」

低い聲で語つてゐるので、何をいつてゐるか、通行人には判らない、が、笑つた聲が大きかつたので、通り合はせた仲間が二三人、振返つて見たが、

「田舎侍だよ」

と、連れにいつたのが兄弟に聞えた。二人はそれにも、

「ははは」

と、笑ふことが出来るほど、豊かな心になつてゐる。

翌日にでもなつてその仲間が、田舎侍が、敵討の石井兄弟と氣がついたら、「見るからに立派な男前だつたねえ」と、手の裏ならぬ、口の裏を返しただらう。

南町奉行松前伊豆守義廣の許へ、北町奉行から豫報がきてゐたとみえ、役人が待つてゐた。

松前伊豆守は兄弟を呼んで會ひ、前後の模様を一々尋ね、保田越前守と同様に、身の落着く先

の有無をたづね、深切な言葉をかけた。

「差當り身の落着くところなしとは氣の毒なり。落着く處無きに於ては、先づ此方へまゐるがよし、如何やうとも相成るべきぞ」と。

ここで一刻ほど過し、外へ出ると兄弟は、芝天徳寺近くに住む知人を訪ね、青山宿の松平安藝守下屋敷に安藝守の嫡子備後守吉長が居り、従兄弟の石井清太夫がそこに居る、と判つたので、青山へ向かつた。

藝州藩の門は、出入りが殊に嚴重であると知つてゐるので、兄弟は門番人に、

「御家中石井清太夫家來に小倉忠右衛門といふ者ござる筈、われら兩人は所縁の者でござる、會ひたく存じて参りました」

門番人はぢろ／＼兄弟を見てゐたが、

「石井清太夫殿家來小倉忠右衛門でござるな。その邊に、暫く控へてござれ」

「御手数を相掛けます」

兄弟は夕日を浴び路端に、待ちうけた。やがて、老いた小倉忠右衛門が出てきた。忠右衛門は石井宇右衛門が討たれた時、小屋に潜ぐつて出てこなかつた小倉傳兵衛の肉親である。瘦身ではあるが矍鑠たる忠右衛門は、白く長い眉毛の下から眼を光らせ、

「やあッ」

と、絶叫して駈寄つた。源藏が、

「忠右衛門」

「おう、あなたでござりましたか」

半藏も體を摺り寄せ、

「忠右衛門々々々々」

「おう、あなたでござりましたか」

源藏がにっこり笑ひ、

「忠右衛門、喜んでくれ。今月九日の朝、伊勢龜山で、敵、赤堀水之助を、兄弟揃つて討留め

た」

「ええッ。そ、それならばお二人様、大手を振つて御座りませ。早速、ご案内いたします。

ほう、左様でござりますか。それは、旦那様にもさぞかし、お喜びでござりませう」

「忠右衛門、聞きたいことがある」

と、源藏が眞剣な顔をした。

「更まつて、何でござります」

「廣島の伯母上は、ご存命であらうな、七歳より十四歳まで、御教訓にあづかり、その後、永年の辛苦の間にも一心變ぜず、伊勢大神宮の御加護をいただき、本意を達したるは、全く、伯母上の御鍛錬による。石井源藏にとり、第一の恩人である。先づ以て大恩人の安否が聞きたい」

「ご尤もにござります。お喜びなされませ、ご堅固でござります」

「さうか」

ほッと源藏が息をついた。兄弟は門内へはひつた。門番人は忠右衛門から囁かれると、眼を丸

くして兄弟を眺め、われ知らず敬禮した。

石井清太夫の母のことを、源藏は永い間、忘れるともなく忘れてきたが、淺野家の門前にきてみると、幼年時代に受けた薰陶が犇々と思ひ出された。

折柄、清太夫は館にゐて留守だつた。やがて、小屋へ歸つてきて兄弟に會つた。

清太夫の喜びは一方でない。

兄弟を四五日滞留させるには家老の許可が要る。その手続きがすむとすぐ、兄弟は保田越前守用人友常左次馬に手紙で宿所届をした。左次馬からは懇篤な返書が届いた。

その日のうちに兄弟は、手紙で、古主の青山家へ、敵討成就の届けをした。宛名は、石井清太夫の指圖で、金森左衛門、大須賀定右衛門とした。定右衛門は筋向ひの青山家下屋敷にゐて

聞番役を勤めてゐた。

青山家の當代は、石井宇右衛門が仕へたころの青山因幡守宗俊の三男で、宗俊が卒した跡を継いだのが嫡子の和泉守忠雄で、その和泉守が貞享二年に卒し、次男は早世して亡かつたので、その次の弟が家を相続した、それが下野守忠重である。

その翌日は五月廿八日。

朝のうちから、じわ／＼と、伊勢龜山の敵討石井兄弟の話といふのが、江戸の武家の間に擴まりかかつた。

正午ごろになると、市中にもその噂がはつと立つた。

この双方の材料は、きのふ奉行所で先を争つて、石井兄弟の龜山書置の控へを寫した、それから出てゐる。

正午過ぎに、青山家の大須賀定右衛門、二木藤左衛門から使ひで、浅野家の石井清太夫に、面會を申込み、往復が何度かあつたのを兄弟は知らなかつた。

源藏は弟に、

「明日、清太夫に斷りいふて、以前、江戸にて、敵討の祈願をこめたる神社佛閣を順禮し、明日、江戸を發足、先づ大阪へ參つて、赤堀が弟の有無を探り、望むとあらば勝負を決し、幸ひ

此方が勝をとつたら直ぐに四國へ渡り、今一人の赤堀が弟を探し、これ又、望むとあらば勝敗を決し、それにも尙、命あらば、廣島へ參り、一類へ重々の禮を述べる。これが、今後、われわれのする事だ」

「明後日、發足ですか——兄上、今度も、龜山を通り抜けませう」

「圖太いことを云ふなよ。今度は板橋からこの間の道を逆に行つて、鶴沼から、加納、垂井——垂井から室原村へ行かう、室原の犬飼家の方々に會つて禮を述べ、福源寺に兄三之丞の墓參を致さうではないか。その先は、高須、醒が井、高宮、草津、それから京へ出て、大阪へ行く」

と、いつてゐる處へ、何か持つて忠右衛門が、にた／＼笑つてはひつてきた。源藏が、

「何だ、忠右衛門」

「石井家の紋の着いた麻上下にご座ります」

「だれの麻上下だ」

と、半藏も眉を蹙めた。

石井清太夫がはひつてきて、

「兩人、後刻、青山筑後守様お使ひがみえる、その麻上下をその節、着用するのだ」

筑後守忠貴は青山家の次代を嗣ぐ人で養子、實は下野守忠重の弟である。

その日の午後、清太夫方へ来た青山筑後守の使者、大須賀定右衛門、二木藤左衛門の兩人共、麻上下着用だつた。清太夫付添ひで、兄弟が出ると二木藤左衛門が、書付を披いて読み聞かせたそれは、

石井源藏  
石井半藏

其方共儀、數年の辛苦、存分の通り首尾よく赤堀水之助を討留め、致し方、残る處これ無き様子聞し召され、一段の儀、これに依つて歸參申付け候、今晚、迎への者差遣はす可し、早々屋敷へ相越す可く候。

これに依つて二木藤左衛門を以て申遣はし候。

源藏と半藏は眼を見合はせ、頭を下げた儘、當惑した。

使者は兄弟が「有難き仕合はせ」と請るのを待つてゐる、が、兄弟は黙つてゐる。

石井清太夫が引取つて、使者に、

「御請の儀、追つて申上げ奉る、暫時のご猶豫を」

と、いつて、兄弟を促し、その場を引下がらせた。

源藏も半藏も今、歸參する氣はない。

そのころも、武家の間、町人の間に、伊勢龜山の敵討の話が、非常な勢ひで擴まりつゝあつた。新聞のない時代は、號外の代りを、人の耳と口とが素早くやつた。青山家では、それと知るや、他家が交渉をひらかぬうちと、急ぎに急いで使者が、先づ、石井清太夫を説きつけたのである。

清太夫にも考へがあつた。源藏半藏は、赤堀の弟兩人にブツかつてみる決心でゐる。それは知つてゐるが要らざる事に思つてゐる。それに板倉周防守が赤堀を抱へた當時の噂と照し合はせてみると、あれほど肩入れが異常だつたのだから、討たれた儘で、棄て、置きもしなからうとしか思へない、だとすると、この際青山家へ歸參するのが、兄弟の身を全うさせる唯一の途でもあり、親族としては、この上、赤堀兄弟と勝負を付ける潔癖は要らざることに、かういふ解釋を付けてゐるのである。

が、源藏も半藏も、先々はとに角、何といはれても歸參したくない。

源藏半藏は清太夫と、めいゝの心を打明けて相談したが、亡父の古主である青山家には、何としても義理がある。

「弟、何としたものだらう」

「兄上、それは、わたくしが申すことです」

二人は坐つてゐるだけで、歸參を延ばすとか、断るとかいふ方法が考へつかない。損得勘定で判断するのでなし、理窟だけで判断するのでなし、損得と理窟の無い武士の世界では、事、ここに至ると、「是非に及ばず」とする他ない。

兄弟は相談の上、その「是非に及ばず」を、一先づとらねばならない氣になつた。

清太夫は喜んで、使者に「歸參の御請」をした。

これで兄弟が水之助の弟二人に挑戦する、第二第三の勝負は打ち切りの他ないことになつた。源藏も半藏も元氣のない顔をした。

その夜、足輕六人、乗物二挺、うしろから騎馬の士が二人、二重丸に口の青山家定紋ついたる提灯をとぼし、青山宿から鍛冶橋内青山下野守忠重の上屋敷へ、石井兄弟が送りこまれた。

その晩、青山家の金森左衛門、本山又左衛門、目付中野久太夫が兄弟に會つた。

その晩のうちに、青山筑後守から、石井兄弟は關口の下屋敷へ遣はされると命令が出た。關口の屋敷には二木藤左衛門の宅がある。

翌廿九日、江戸の到るところで、伊勢龜山の敵討が、評判になつてゐた。その噂の多い中を、兄弟は再び乗物で、足輕にまもられ、騎馬の士に警固され、鍛冶橋内から關口へ移つた。もとより、市中の評判は、兄弟の耳にはひつてゐない。

兄弟は青山家からいろ／＼の物を賜はつた。

が、兄弟はどう考へても、赤堀の弟二人の決心の有無が確めたい。敵討には珍しい「相狙ひの敵討」だつたので——三之丞と水之助の間柄が相狙ひ。源藏兄弟と水之助の間柄はさうでないが、定めし、赤堀の弟二人は、兄の敵と源藏半藏を狙ふであらうといふ、豫期が去らない。

二人は相談の上、暇願ひの書付をつくり、六月廿四日、金森左衛門、本山又左衛門、金森彦左衛門に宛て、二木藤左衛門を経て出した、が、それはその儘で、翌廿五日、青山下野守忠重に御目見得仰付けらると達してきた。御目見得がすんでは抜きも差もなくなる。

「弟、大阪へも四國へも、廣島へも、行かれぬぞ」

「兄上。御目見得の席上、お暇願ひを致してはいけませぬか」

「非禮だ——が、やらう、他に手段がない」

御目見得の儀式は莊嚴で、兄弟が、發言する機會などない、のみならず、明廿六日江戸發足、濱松に遣はされるとその席で命令が出た。最早、どうにもならない。

辞表は却下。源藏は亡父宇右衛門の通り知行二百五十石、半藏は新知百五十石を給はつた。

その晩、青山宿の屋敷で青山筑後守に謁し、關口の屋敷へ夜更けて歸り、明朝出立の仕度にかかつた。

兄弟は江戸中の大評判の渦の中を、人目に立たず、五月廿六日の朝出立した。野口又七、石黒幸右衛門の兩士が心のうちでは赤堀方の襲撃を期し、足輕七人を前後に配し、兄弟を警固した。兄弟には二人の仲間が付き、萬事の世話をした。

七月二日、濱松着、三の丸の長屋の一ツを給はつた。

九月廿五日、源藏は石井熊之丞友將、半藏は石井左仲久亮と改名した。改名を命ぜられたのである。

その年十二月十四日の夜、赤穂浪士の吉良邸討入りがあつた。浪士の耳目が、源藏兄弟の行跡に、向いたことがないとは考へられない。

元祿十五年閏九月、青山下野守忠重は丹波龜山へ國替を命ぜられた。

丹波龜山は伊勢龜山と紛らはしいので、明治維新後龜岡と改められた。

國替道中に、決死の十三人が警護に着くと知つて兄弟は、兄弟二人だけの道中を願つたが、許されず、却て江戸へ召されて、小石川關口の屋敷に置かれた。この江戸道中にも決死の士が三人警固した。

翌十六年十二月、丹波龜山勝手を命ぜられ、四日江戸發、十八日丹波龜山着、又もこの道中を決死の士が警固した。

寶永二年三月、熊之丞(源藏)は卅八歳、左仲(半藏)は卅五歳、兄弟を付け狙ふらしき者が、丹波龜山の城下を徘徊してゐるといふので、外出を禁じられた。それだけで、その後、赤堀方の動きらしいものは起らなかつた。

熊之丞は四十五歳まで、赤堀方の襲撃を豫期し、獨身でゐたが、人々の勧めに従つて、正徳二年、市瀬伊左衛門の妹分——實は家中の佐久間八之丞の姉を妻に迎へた。市瀬家の先代伊左衛門の娘は三之丞の許婚であつたから、順當だつたら、今の伊左衛門の姉が三之丞だつたのである。

左仲は四十四歳のとき、病弱を名として青山家を去り、おなじ丹波の何鹿郡上林の藤掛監物に仕へた。

熊之丞は槍奉行、大目付、寺社奉行などを勤め、享保六年七月廿五日、五十四歳で病歿、その後裔が現に榮えてゐる。

後記

伊勢龜山の敵討が赤穂浪士を刺戟したといふことを、龜山の人々からよく聞いた。それはさうだらう。龜山の仇撃があつて數ヶ月目に、赤穂浪士の討入りがあつたのだから、さうしてその當時、評判になつた事件だから、どういふ影響を與へたか與へないか詳かでないが、赤穂浪士の耳にはいらぬではなかつたらう。

翌年、早くも浮世草紙の『東海道敵討元祿會我物語』作者・都の錦が刊行された、都の錦とは西澤一鳳だといふ説がある。『常山紀談』、『月堂見聞集』、『明良洪範』、『一話一言』、『過眼集』、『大阪訪碑録』、『鈴鹿郡野史』その他、石井兄弟のことを大なり小なり書いたものが尠くない。『駿國雜志』には轟金平といふのが赤堀の側で鬪死したやうに書いてあるが、假設の人物が實在と誤られたものだつたので、採つてこの作中の人物にする氣が起らなかつた、尤も私のこの作中にも假託の人物がすこし登場してゐる、が、事件を改變する爲のみに登場させることはしなかつた。

芝居の方では赤堀水之助でなく、赤堀水右衛門としたものであるが、水之助より水右衛門の方

が敵役らしいから、さうしたことが、効果を出したに違ひない。この作の中でも鈴木檢校とあるのは伊藤檢校だが、ふと始めに誤記したのに心付き、更めんとしたが妙に直らないので、その儘で押し通すことにした。これは効果でも何でもない、妙な、私だけのことだ。この人が三絃の名手だつたといふ據りどころを私はもつてゐない。

石井宇右衛門の父三之丞(彦七)正友が、淺野長見に従ひ廣島に入つたころの役は代官で、安南郡(今の安藝郡)で八千餘石の支配をしたことを、『藝藩輯要』で知つた。正友と宇右衛門の出入り等は、『青山宗俊傳』、『京極高次傳』とか、『戸田氏鐵』、『藩翰譜』を參照して推定も加へてある。青山家の家老の姓名を『寛文武鑑』に據つたごとく、『大阪城誌』、『新撰美濃誌』、『攝陽奇録』、『近江名跡誌』、『大垣繁昌誌』、『元凱十種』その他を資料にしたところもある。

龜山の某君が古い稿本を持つてゐると聞いたが見ずに終つた。『石井實記』を根底としてこの作は他に參酌の材料を求め、大抵、事件の骨子を動搖させることなくやつた心算である。人物の性格等は作者が與へた。

數多き敵討のうちで、最大の時間がかかつたものではない。四十餘年、五十餘年を経た敵討すらもあるが、石井兄弟の事件は幾つもの特殊性が有たれてゐることが、さうしてその経過と結果とが、討人と敵の双方の面から、學ぶべきところと、棄てるべきところがある、それぞ參考にな

るだらうと思つてゐる。

この作は『石井源藏兄弟』と題し、都新聞に昭和十四年三月二十五日から同年十一月三日まで、百九十回、連載されたものを、今度、改訂を施したものである。

昭和十七年春

作者

昭和拾七年七月五日初版印刷  
昭和拾七年七月十五日初版發行

(一〇、〇〇〇部)

二十九年目の仇撃 後編

◎ 定價壹圓五拾錢

(出文協承認)  
ア 60302 號



發行所

著者 長谷川 伸  
東京・芝・二本榎西町三

發行所 戸田 城外  
東京・品川・上大崎三ノ三三六

印刷者 西川 喜右衛門  
東京・神田・小川町二ノ一二

印刷所 株式會社 秀英社  
東京・神田・小川町二ノ一二

東京市品川區上大崎三ノ三三六

大道書房

會員番號一六〇四六番  
電話大崎(49)〇九四九番  
振替東京一六七三四〇番

配給元

日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二ノ九



425  
120

終

